

③ あの楽器も中央区で創られた!? 楽器と緑が育む音楽の物語

メイドイン北大江の楽器で野演演奏会
北大江には、バイオリン、ハーブ、チェロ、コントラバス…などさまざまな楽器の職人や卸売商、いわば楽器の匠が集まっています。そのルーツをたどると、東横堀川のほとりにある丸一商店へとたどり着きます。「日本最古の絃楽器輸入商」を掲げる丸一商店は、1937年創業。演奏会からの信頼も厚く、時には地下サロンドコンサートを開くなどして、北浜界隈の老舗として知られています。
その丸一商店から独立した馬戸修さんが、北大江でバイオリン工房のLiuteria-BATOを開いたのが1979年だといふから、もう30年以上も前のこと。さらにその後継したのが鈴木英俊さん。以来、仲間が仲間を呼ぶというように、青山ハープをはじめ、山本スティングハウス、弦楽器FUYA、中川弦楽器、シハミュージックといった楽器の匠が北大江に店を構えることになりました。馬戸修さんの息子にあたる馬戸建一さんにそのあたりの経緯を尋ねると、「丸一商店さんで修行した人がたくさんいたことあると思います。北大江は緑が多くて公園が多いので環境がとてもよい」とのこと。今日は、北大江公園を会場にした「北大江それがれコンサート」が毎年秋に開催されるなどして、北大江は楽器と音楽が流れる町として定着しつつあります。

日本の音楽文化を担う中央区
中央区で楽器といえは心斎橋筋商店街に店を構える三木楽器があります。ロゴマークを今も「since1825」の文字。文政年間には河内屋佐助さんが書籍業として創業し、楽譜の翻訳出版なども経て今へと至っています。中央区は日本の音楽文化の一端を確かに担っています。

中央区の匠マップ



8 バイオリン
Liuteria-BATO
馬戸 修さん
オーダーメイドのバイオリン工房として1979年に創業。道路に面したガラス張りの工房では、ときにコンサートなども。「職人といえは念を入れて、というイメージですが、楽器は女性的なものなので、鼻歌でも歌う気持ちで、明るく作ってほしいですね。」

9 バイオリン
鈴木弦楽器
鈴木 英俊さん
マンションの1フロア全体に、工房や倉庫を構え、古いバイオリンなどを修理、販売。「古いから良いというものではありません。ちゃんとした人が作ることで大切にしたい。」

古いバイオリンの良さは材料が十分に乾燥して、変化することが少ないから。そう、バイオリンの弓は馬の尾毛を使用。馬種によって太さ、硬さ、色など変わる。でき上りは美しく、緑色と色合いが目玉。

「まっちゃまち」のこと
大阪で最も有名な職人のひとり「松下幸之助」でしょう。現バネソニックの創業者。松屋町筋商店街は、その松下幸之助さんが自転車で丁稚奉公した場所だといわれています。平塚23年にはNHKのドラマ「神様の女房」でも登場し、感心した方も多かったのではないのでしょうか。大阪から世界のものづくりに、ここにも歴史がありますね。

松屋町から谷町四丁目界隈のこと
筆と和紙からペンと洋紙へと、紙の利用が変化する時代、「文房具」は、西洋から輸入された道具といわれて、「欧米文具」と言われてきました。「マツクインキ」が懐かしい内田洋行や「リングファイル」がどこのオフィスにも見かけるリトラは、今も松屋町から谷町四丁目界隈にあります。今は、東成区にオフィスを構えるココも以前は南久宝寺寺にありました。南久宝寺には、1910年創業の洋館が立派なクワツツがあります。クワツツは事業拡大に伴い営業拠点を、東大阪市の文具団地に移しましたが、本社は今もこの地にあります。

中央区で町工場といえは印刷屋
昭和54年の南区での工業統計調査によると事業所数640軒、出版・印刷およびリブ・紙・紙加工が272と、4割以上を占めていました。今でも、空堀界隈の古い街並みの中に印刷屋さんの町工場の音が響きます。中央区には、船場の和装産業の集積と松屋町筋から谷町四丁目にかけての文具産業が集積していた関係で、和紙、洋紙両方の需要があったこと。さらに隣接する天王寺区にあった大きな印刷屋「三和印刷」から広がったこと等によるのではとのこと。

14 金網
森田金網
森田 一雄さん
おもち、ざる、食材の裏返し、様々のごみ受け…金網の用途は実に多岐。製品ではサイズや網の目の大きさが合わないときに必要なのが、手づくりの特注品。森田さんは、道具屋敷をはじめ、全国から依頼の絶えない職人です。安堂寺橋通りからガラス戸越しに見える店の間（見せの間）で大正時代から三つづつ作られた気さくな職人さんですが、跡継ぎがなく、静かに営みを終えようとしています。

16 鉄
好崎量店
山名 孝一さん
戦時で焼け出された三休庵から現住所へ。叔父が奈良・八木で畳の材料屋をしていた縁から畳屋を開業した。「畳は生きものだから呼吸をしているんです。畳の上に敷きものを敷いたままではよくないですね。」

17 神社×氏子
高津宮
小谷 真功 木村アルミ箔 木村 裕一さん
高津宮の氏子として、菓子屋に携わるメーカー、節間屋が数多くあることから、「氏子ロール」のお菓子を開発。氏子の力を集結した、新たなまちおこしの形として注目されています。「職人にも打ち上げ花火が終わらないよう、継続して取り組んでいきたいです。」

④ まちに根づき、まちが育んだ匠

営み続ける職人町の匠
鍛屋町(かざりやまち)、木挽町(こぎきょう)、鍛冶屋町(かじやまち)、炭屋町(すみやまち)…これらはかつてのミニ界隈の町名。職人がそのままたちの名前となっていることから、界隈に多くの匠、職人が営んでいたことがわかります。町名が変わった今も、営み続ける匠たちの姿を見ることができ、往時を思い起こすことができます。
南船場4丁目、オフィスの地下に本家を構える山友商店は、ふすまの引手など装飾金物の製造、卸を手がけています。創業は昭和5年。天王寺区人町。その後、昭和28年に現在地へ、金物を使った装飾品=鍔(かざり)関連の匠が界隈に集積して鍛屋町と呼ばれていた時代が、現在の街並みにつながっていることを知ることができます。

ハレのまちを彩る匠
一方で、南船場〜心斎橋エリアは宝飾関連のさまざまな匠が集まる宝飾業者の町。ジュエリータウンとして西日本随一とも言われています。ダイヤモンドや色石の輸入、宝飾鑑定士ジュエリーデザイナーなど、関連するさまざまな匠がこの町に存在していますが、昭和30年頃創業の北野商店では、ルビー、サファイア、キャッツアイなどの色石を中心とした宝飾品を営まれています。北野克己さんの娘で三代目にあたる能勢利枝さんはジュエリーデザイナーとして活躍。時代に合わせて形を変えながらも、宝飾業が家業として受け継がれています。

人形のまち「まっちゃまち」のブランドとプライド
松屋町は人形の問屋街として知られていますが、意外にもそうしたイメージはそれほど古いものでもありません。もともとは、船場の問屋街の近くにあつて、生活用品を扱う問屋街として発展。地方から船場へ買い出しに来た人たちが立ち寄って、お菓子や玩具を買い求める町でしたが、昭和30年代に入ってから人形を扱う店が飛躍的に増加し、最盛期には約80店舗もの人形店が集積したといわれています。そんな中、大正時代創業の「人形の熊野」は、当初から市松人形を製造販売するなど、人形一筋で営んできた問屋。三代目社長の熊野建介さんは「なるべくそうでなくならない。人形の世界は意外に日本人の生活に根強く残っている。人形専業では厳しいが、なんとか続けていきたい」と語る表情には確かな誇りが感じられました。

10 ハープ
青山ハープ
青山 鉄舟さん
日本で唯一、グランドハーブを製造するハーブメーカー。そのショールームが北大江公園に面したビルの一室にある。「本の丸柱から手づくりで彫りあげた作業者の姿です。楽器の装飾もすべて手づくりで、彫ったものなんですよ。」

11 手作り時計
CRAFZ
秋友 清孝さん
JHA(日本手作り時計協会)関西の直営店として、13人の手作り時計作家の作品を販売、定期的に講座なども。「父が製菓業をしていた土地で2000年に創業しました。職人といえ、1点ずつすべて表情が違うのが手作り時計の醍醐味です。」

12 大理石
明治大理石
中家 祥裕さん
さまざまな大理石の輸入、加工をとおして、新築から歴史建築物の再生工事まで、さまざまなイベント出店や美術家への作品提供なども。「石をもっと身近なものにしたい。住民のみならずと一緒になって、まちでいろいろとやりたいですね。」

13 人形
人形の熊野
熊野 建介さん
実は松屋町で数少ない、創業以来、人形一筋で続けた歴史を持つ。「頭の製作から、衣裳の着付け、小道具など、人形は様々な技術を集約して成り立っています。誰人形や五月人形は日本ならではの行事として、意外に根強いものがありますね。」

15 漆
菱屋
廣田 嘉秀さん
1926年創業の鼻緒作りの老舗にして、伝統にとらわれない、鼻緒サンダルのようなオリジナル商品を展開。「本によい物を若い人に見てもらおう機会が少なくなりました。売れる売れないは別にしても、日本で受け継がれてきた文化を知ってもらうために必要です。」

中央区の匠・ものづくり年表

年代	ものづくりのできごと	主なできごと
縄文		大阪市第1号(人骨が森の宮遺跡から発掘)
古墳	玉造地域で玉作部が勾玉づくりで活躍	ガイドナビvol.1.4参照
戦国	1533年(天文2年)	大坂に本願寺が再興。次第に商人が集まり、門前町が形成
安土桃山	1583年(天正11年)	大坂城築城開始。安土桃山城の廃城に伴い、城下町に住んでいた技術者が伏見町など区内に移住。全国から巨石などの建築資材や技術者が集まる。残念石はその名残り
江戸	1585年(天正13年) 1600年(慶長5年)頃	東横堀川開削 西横堀川開削 ガイドナビvol.1.3参照
	1614年(慶長19年) 1616年(慶長20年)	大坂冬の陣 大坂夏の陣 道頓堀の開削 ガイドナビvol.1.10参照
	1622年(元和8年)	島之内で手工業発展
	1634年(寛永11年)	地代免除に感謝した町民が協力し「大坂町中時報」をつくらせた ガイドナビvol.1.5参照
	1636年(寛永13年)	住友綱次が現在の跡地に移転。後に国内生産量の1/3を占めるまでとなる ガイドナビvol.1.9参照
	1726年(享保11年)	大丸が呉服店として心斎橋筋に進出 ガイドナビvol.1.9参照
明治	1870年(明治3年)	大阪砲兵工廠建設
大正	1933年(昭和8年)	現在の谷町筋界隈で徳川幕府末期、西洋式軍服の製造が始まったことが契機となって紳士服産業が集積
昭和	1937年(昭和12年)	御堂筋拡張に伴い、旧御堂筋に履物問屋が集まり、履物街となる「日本最古の絃楽器輸入商」を掲げる丸一商店は、1937年創業。その後、北大江に楽器店が集まる
	1955年(昭和30年)頃 1970年(昭和45年)	船場で織産業者が最盛期 松屋町に人形を扱う店舗が飛躍的に増える 船場センタービル完成 ガイドナビvol.1.8参照
平成	1982年(昭和57年) 1989年(平成元年)	町名変更でものづくりに困った町名が減少
	2009年(平成21年)	高津宮で氏子ロールが誕生(氏子報告祭)

⑤ 氏子のチカラを結集 高津宮の新名物ができるまで

氏子と神社のコラボレーション
866年の創建。大阪市歌にも歌われている高津宮。江戸時代は展望の名所としても知られ、また上方落語の舞台として登場するなど、大阪の「高津宮さん」は全国的に親しまれてきました。この高津宮の氏子として、界隈に数多くあるお菓子の原材料メーカー、問屋が力を結集して、新たな名物菓子を開発。「氏子ロール」や「菓子ロール」などと名付けられ、境内の富華カフェで販売されています。(※菓子ロールは2013年12月現在、発売休止中)

氏子のチカラを結集!
氏子として参加したのは、アルミ箔の専門問屋にして、近年、さくら菓子製作所としてお菓子制作に乗り出している「木村アルミ箔」をはじめ、包装資材の「福重」、チョコレートの「前田商店」、砂糖の「テオール」、和菓子材料の「上野忠」、ナッツの「イシハラ」の6社。米粉を使ってもちもちに仕上げた「菓子ロール」菓子には、単なるお菓子ではなく神饌(しんせん)、いわば、神社と氏子のコラボレーションといえます。「氏子」というのは、地域にとっての資源、その発掘、活用を通して、神社や地域の賑わいに貢献できればと木村アルミ箔の三代目・木村裕一社長。

まちおこしへ発展「菓子菓子祭り」
小さな菓子から始まって、現在は菓子菓子製作委員会を立ちあげ、秋には「菓子菓子祭り」を高津宮の境内で開催。上記6社に加えて、より広く界隈の食品、飲食関連の店舗や企業まで巻き込んだ、まちおこしイベントにまで発展しています。こうして生まれた新たな名物が今から何十年、何百年と歴史をつくっていくと想像すると、これほど頼もしい話はありません。



⑥ 履物の匠は町中にあり 受け継がれる伝統と新たな挑戦

履物問屋が集まる御堂筋(おくらあと)
堺筋の日本橋3丁目交差点から松屋町筋にかけて、東西に延びる通りには履物問屋が集まった。通称「おくらあと」。昔の御堂筋町にあつた。もともとは下駄や草履の職人はいたが、昭和初期の御堂筋大拡張とともに、御堂筋の界隈にあった履物問屋が集団で移転してきたこと、履物街になったという歴史を持っています。昭和3年創業、鼻緒からはじまって、現在は高級草履、かばんのメーカーとして通りに店を構える「菊之好」。店員さんもほとんど若い、黒門市場そばの町家が本社工場として使われている。玄関に入って

2階へと上れば、熟練の職人が草履の台に螺鈿細工(らでんざい)を施すような細かい仕上げ作業を行って、外観からはなかなか想像できない匠の現場がありました。「ひとりの職人が最初から最後まで手がけてますので、台の意匠はどんな注文でも受けられるんです」と菊之好の四代目社長、栗本真直さん。なお、栗本さんは年に一度、地元の高津小学校で草履や下駄についての出張授業を行っており、大阪の履物文化を継承してつづいていくための、地道な取り組みを行っています。

受け継がれるオリジナルへのこだわり
同じく、御堂筋の近くにも作業場を持つ「菱屋/カシノプロ」。シマウマのモチーフは女性でもたもたの履物も多いですが、「オリジナルの商品をつくりたい。組み立て業にはなりたくない」と言う二代目の廣田嘉秀さんの志は、三代目の廣田裕宣さんにも受け継がれて、ゴムの底の草履や鼻緒サンダル、デニム履物など、和装に洋のテイ

